ドキュメンタリー映画「カレーライスを一から作る」

農水省が応援しているドキュメンタリー映画「カレーライスを一から作る」を観ました。これはシーフードカレーの話ではありませんし、魚食普及の話でも有りません。食育のお話ですし、ある意味、人間の大元のお話です。

「グレート　ジャーニー」というフジテレビの番組を覚えている方は、中年以降の方でしょうか。関野吉晴という探検家が人力で、南アメリカ・チリのナバリーノ島からタンザニアまで（北ルート）のおよそ5万キロを、人類拡大の足跡を逆ルートから遡って行く旅の行程（1993年12月 － 2002年2月）に挑み、その姿を追った作品（全8回）でした。(WIKIPEDIAより、この番組はDVDで見られます。)

この関野さんは現在、武蔵野美術大学で先生（文化人類学）をされています。映画は関野ゼミ生が、野菜・米・肉は勿論のこと、調味料・塩、皿やスプーンまで全部一から自分達で手作りする過程を追いかけています。

学生たちは、カレーの具は肉にすることにしました。先生のアドバイスで最初はダチョウの雛を育てることにしましたが、2羽の雛はあえなく途中で死んでしまいます。次はホロホロ鳥とニワトリにして、鳥小屋を構内に作り当番が死なないように注意して雛から育てていきます。数ヶ月して大きくなった時、そして食べる時、このホロホロ鳥とニワトリは絞めて食材にしなければなりません。このとき、学生たちはちゃんと屠殺出来たでしょうか？

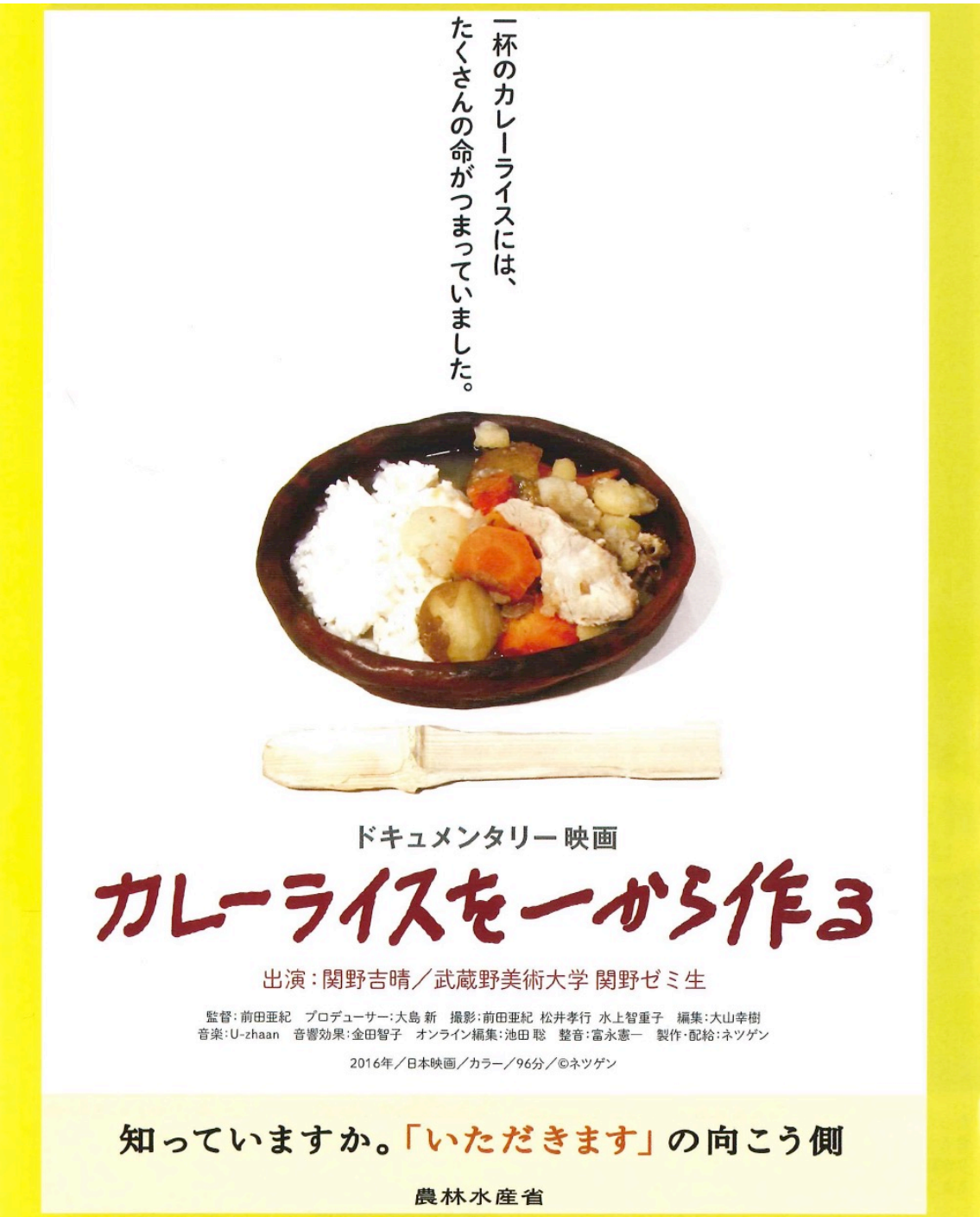
多少は感情が高ぶっているようではありましたが、自分達で首を折り、包丁で頚動脈を切り脱血し解体をやりきりました。そのときの言葉が印象的でした。「最初から食べるつもりで育てていたので、少しはかわいそうだったけど、やはり最後は食べ物として処理した。」でもこの学生の目には涙も光っていたように見えました。映画の途中に、屠畜場の職員の方が学生に講義をしている場面があり、「一日に何頭も屠殺しているが、そのことでご飯が食べられないとか、かわいそうだと思ったことは無い。」と言うような発言も収録されていました。(話は飛びますが、捕鯨問題を語るとき、西洋人も牛や豚を殺して食べているではないか、という言い方を時々聞きますが、最初から食べられるために人が育てた動物を殺すのは倫理的にも、感情的にも何の問題もないのだ、と映画を観ながら思いました。)

食べるものを全て自分達で作ること、味そのものとしてはそれほど美味しくなかったかもしれませんが、このカレーの味は学生たちに濃厚な何かを残していったように思いました。

(K)

映画のチラシ↓

表


一杯のカレーライスには、
たくさんの命がつまっていました。
ドキュメンタリー映画
カレーライスを一から作る
出演：関野吉晴／武蔵野美術大学 関野ゼミ生
監督：前田亜紀　プロデューサー：大島 新　撮影：前田亜紀 松井孝行 水上智重子　編集：大山幸樹
音楽：U-zhaan　音響効果：金田智子　オンライン編集：池田 聡　整音：富永憲一　製作・配給：ネツゲン
2016年／日本映画／カラー／96分／©ネツゲン
知っていますか。「いただきます」の向こう側
農林水産省

裏

探検家・医師の関野吉晴さんによる武蔵野美術大学の課外ゼミ、通称関野ゼミの2015年の活動は「一からカレーライスを作る」というユニークなものだった。野菜や米・肉はもちろん、スパイスや塩、器やスプーンまでもすべて自分たちで一から作るという途方もない計画だ。関野さんの意図は、「モノの原点がどうなっているかを探していくと社会が見えてくる。カレー作りを通して学生たちには色々なことに"気づいて"もらいたい」この呼びかけに100名を超える美大生たちが集まった。「おいしいカレーが食べたくて…」そんなつもりで始めたが、思うように野菜は育たず、雑草に悪戦苦闘。一杯のカレーのための果てしない道のりに、多くの学生が挫折する一方、世話に励むあまり家畜に愛着が湧き、殺すべきか葛藤する者も…。これは「食べる」「生きる」という、人間にとってごく当たり前で、基本的な営みを見つめ直すドキュメンタリー映画である。
関野吉晴による「食」の探検
一杯のカレーライスに何を知る？
関野吉晴
1949年生まれ。人類の足跡を辿る「グレートジャーニー」の探検で知られる。1999年植村直己冒険賞を受賞。
野菜は？
ヒトは他の生き物を食べなくては生きられない。でも生き物って何だ。そんな単純なことがわからなくなった現代を、食の一切を体験することによって考えなおす衝撃の授業。
… 山極 寿一（霊長類学者・京都大学総長）
スパイスは？
ひと皿のカレーライスによって社会を解読し、同時に個人の生き方まで問うてくる。なんと刺激的でクールな試みだろう。
… 平松 洋子（エッセイスト）
肉は？
塩は？
私たちは「たくさんの命」を食らい、自らの命を紡ぐ。今、その命を育む「食」が歪められている。関野ゼミの学生さんたちがこの歪みと格闘する姿は、動物を屠ることを生業とする者として、頼もしく感じる。
… 栃木 裕（全芝浦屠場労働組合委員長）
たった一皿のカレーライスを食べるのに9カ月もかけるなんて、常人では思いつかない。登場する学生たちの気持ちの移り変わりが観る者の胸を打つ。最後に、カレーライスの匂いが漂ってくるような映画である。
… 藤田 和芳（大地を守る会代表）
米は？
この現代社会においてなんと酔狂な。関野さんはいつもながら「遊び」の達人。でも遊びの中にこそ「学び」があると気づかせてくれるのも関野さんなのだ。
… 高野 秀行（ノンフィクション作家）
www.ichikaracurry.com